

JICA横浜・日本移民学会共同開催公開講座  
「日本人と移住」第9回講義

# 東南アジアへの移民

早瀬 晋三

(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科)

# はじめに

- \* 1868～1941年までの国外移住者数776,304人の内、東南アジアへは75,955人、その内フィリピンへは53,115人、仏領インドシナ602人、シャム505人、英領マレー11,809、蘭領東インド7,095人、英領ボルネオ・サラワク2,829人
- \* 特徴1： 海域社会への移住、輸出。必ずしも日本人や日本製商品が優秀であったわけではない。
- \* 特徴2： タイを除き、欧米の植民地。支配・占領された側の資料は少なく、文献史料に基づく研究は支配・占領を正当化する危険性がある。

# 「移民」とは

- \* 「移民」という用語は、現在意味する永住または半永住を目的とした海外渡航者と違い、海外出稼ぎ労働者の意味で使用された。
- \* 一八九六年六月一日施行の「移民保護法」第一条「本法ニ於テ移民ト稱スルハ労働ニ従事スルノ目的ヲ以テ外國ニ渡航スル者及其ノ家族ニシテ之ト同行シ又ハ其ノ所在地ニ渡航スル者ヲ謂フ」と定義
- \* 具体的に当時の「移民」とは、「耕作、栽培、牧畜、漁業、鑛業、製造、土木、運搬、建築等ニ従事シ勞力ヲ供スル者」および「炊事、洗濯、裁縫、給仕、看病等ノ爲メ家事ニ使役セラルハ者」を指すものと定義

# アメリカ植民統治下初期の労働不足

\* アメリカは、低賃金または無賃金によるフィリピン人の単純労働によって、道路、鉄道、港、兵舎、電気・通信、上下水道施設などのインフラストラクチャーを整備し、鉱山・森林開発をおしすすめ、商品作物栽培の普及をはかることを期待していた。しかし、アメリカ人植民地行政官は、すぐにフィリピン人が予想以上に働かないことに気づいた。そして、その理由はフィリピン人の体力の貧弱さと雇用主の待遇の問題にあるとした

\* スペイン人がフィリピン人の前で肉体労働を見せることがなかったため、肉体労働を蔑視するようになった

\* 労働のサボタージュこそが、植民地権力にたいするささやかな抵抗

\* フィリピン人にとって他人のためにする労働とは、レシプロシティにもとづいておこなわれるという認識があり、賃金による労働習慣は発達していなかった。このレシプロシティにもとづく労働は、依頼の有無、報酬の有無にかかわらず、日ごろの人間関係によっておこなわれる労働提供で、見知らぬ人とのあいだにその関係は存在しなかった

# 労働者不足対策

\*「正当な賃金さえ払えば、フィリピン人は働く」

\*フィリピン人若年層を教育を通して低賃金労働者に育成することを期待

\*アメリカ本土での経験から、中国人や日本人労働者は高い評価—高い賃金を求めず、労働賃金に固執し、丈夫である—を得ていた

\*本国の「中国人入国禁止条例」が適用され、全面的に禁止された。中国人はたんなる労働者に留まらず、やがては経済力をもつことが恐れられた

\*労働組合は、安い賃金で重労働するアジア人クーリー労働の導入によってフィリピン人労働者の生活が脅かされるだけでなく、労働の質が低下することによって奴隷的労働を強いられることを懸念

\*「人力車ヲ禁止スルコト或ハ假設之ヲ許可スルモ比律賓人ノ車夫トナルヲ禁シ彼等ヲシテ牛馬ノ伍伴ニ入ラシメサルコト」とし、人力車の導入に強く反対

# 日本人労働者の統計資料分析

**\* 外務省外交史料館文書三門二類八項三八目「移民取扱人ヲ經由セル海外渡航者名簿」**

旅券番號、渡航許可ノ官廳及年月日、氏名、族籍及職業、年齢、渡航ノ目的、渡航地、渡航ノ年月日、契約期限、渡航者總數

**\* 外務省外交史料館文書七門一類五項四目および『通商彙纂』掲載の在住日本人職業別人口表**

# 分析結果

\* 第Ⅰ期(1903～05年)(03年10月から04年末までいわゆる「ベンゲット移民」期)

「ベンゲット移民」像は、福岡、広島、熊本、和歌山、山口県出身の手に職のない農村出身の農民が、おもに肉体労働に従事することを目的に、三年間の「契約期限」、単身でフィリピンに渡っていった

\* 第Ⅱ期(1907～12年)の特徴は、本来フィリピンで禁じられていた契約移民として、日本人労働者が渡航していたことである。労働の目的は大工、木挽・柚職、農業の三つに大別でき、それぞれ行き先が具体的に明記されている

\* 第Ⅰ期、第Ⅱ期で共通している点は、女性および携帯家族の人数が極端に少ないこと

# 職業

\* 酌婦、特種業者、雑業などの名称で記載されている「からゆきさん」

フィリピン各地に広がり、とくにアメリカ軍基地・駐屯地、開発のために単身男子労働者が集まるところに集中

\* 大工：植民地開発地で集団で雇われた

\* 単純肉体労働者

\* 木挽き・柚

\* 炭鋤夫

\* 農業

\* 漁業

\* 商業

\* 定着性のない出稼ぎ型で、農業、漁業、商業に一部定着の兆しがみえるが、本格的段階に達していない



# 日本人労働者に対する評価と展望

\*「ベンゲット移民」を雇用したアメリカ人は、白人、黒人労働者のつぎに日本人を評価し、とくに大工や石工といった技術を要する作業に高い評価を与えた。しかし、長く工事現場に留まる者が少なく、ストライキを起こすなど問題点もあった。

\* 岩谷讓吉書記生の報告では、「支那人及比律賓土人ニ比シ何等軒輊無クシテ寧ロ劣ルコトアルモ勝レルコト無ク」と評価

\*「ベンゲット移民」はフィリピンの労働現場に到着後、その条件の違いにひどく失望し、「往々事實ヲ枉ゲテ悪口シ罵詈シ取扱移民會社ヲ怨ンデ却テ意外ノ禍ヲ惹起」することさえあった。そして、多くの日本人労働者が赤痢、チフス、マラリア、脚気にかかり、落命した。

# 虚像の成立

\*「ベンゲット移民」を含め、明治期フィリピンの日本人労働者の評価は、今日まで一般に岩谷讓吉報告「比律賓群島移民事情」『移民調査報告 第六』（明治四四年編纂）にもとづいている

\* 岩谷讓吉の原報告書は、「比律賓内部ノ事情軍事基地移民政策ニ亘リタル」ため機密信とされ、印刷にあたって大幅に削除された。削除された部分は、軍事関係の記述のほか「からゆきさん」「労働者の欠点」など日本の体面を穢し、将来の移民送り出しに不都合と思われた箇所

(ロ) 日本労働者ノ缺点」はすべて削除

## 評価の二面性

この傾向は、在フィリピン日本人外交官の評価に目立つ。かれらは一面において、日本人はフィリピン人より優れ、フィリピンの開発に日本人労働者は不可欠であると強調した。しかし、実際にかれらが見たフィリピン在住日本人は、かれらの理想とする日本人労働者ではなかった。このフィリピン人にたいする日本人の優越感と現実の日本人労働者の二面性は、外交官だけでなく、一般日本人労働者のかれら自身の評価にもみられた。日本人個々人の誇りと優越感、それらはかれらが日本出発前からもっていたものであろうが、フィリピンでの日本人労働者の本来あるべき姿を生み、それが日本人による日本人労働者の希望的評価につながっていったものと考えられる。このことは、日清、日露戦争に勝利し、富国強兵を推進していた近代国家としての明治日本の姿と無縁ではないだろう。しかし、現実のフィリピンの日本人労働者は、フィリピン諸島を植民地とし、植民地開発をすすめていたアメリカ人に雇用された一介の労働者にすぎなく、アメリカ人にたいする劣等感さえあった。その裏返しとして、フィリピン人にたいする優越感がより強くなったと考えられるが、そのフィリピン人からも尊敬されなかった。日本という「国家」の力強さと日本人労働者「個人」の無力さとの矛盾のなかで、評価の二面性が生じたものと考えられる。

アメリカ植民統治下初期(明治期)フィリピンの日本人労働は、注意を喚起するほどの規模、内容ではなかったと結論づけることができる。そのため大規模な排日運動は起こらず、渡航希望者もさほど多くなかったことから、日本政府もあえて渡航者を制限する必要はなかった。日本人労働者で、将来定着が望めたのは、土地を購入し、日本人資本・経営のもとでアバカ栽培をはじめていたダバオの日本人と、フィピン社会のなかで商業活動をおこなっていた雑貨商だけであった。前者は第一次世界大戦を契機として飛躍的な発展を遂げ、第二次世界大戦前日本人人口2万のマニラ麻産業の町を形成した。後者は日本からの大資本の進出後も、独自のフィピン社会の人脈を通して活動をつづけた。このほかの日本人労働者は、地理的に近いことから自然流入した出稼ぎ者で、景気に敏感に反応し、長くフィピンに留まることはなかった。そして、フィピン人が直接目にした当時の日本人は、農村出身者で衛生概念に乏しく、とくにフィピン人が尊敬するような職に就いておらず、明らかにアメリカ人、スペイン人に比べ見劣りしたため、フィピン人から尊敬される存在にならなかった。雇用者、被雇用者双方が長期的な雇用を望まず、日本人、フィピン人双方が互いに尊敬しない状況でかぎられた人数の日本人労働者が雇用されたため、フィピン社会への影響もかぎられたものに留まった。

# マニラ麻産業

- \* グローカルに考える(世界史、地域史、国史、地方史)
- \* 世界史： 船舶用索具、機械用ロープの原料として、重要な戦略物資
- \* 東南アジア史： サトウキビ、ゴム、ココナツなどプランテーションで栽培されたなかで、フィリピンでのみ栽培
- \* フィリピン史： サトウキビ、ココナツとならぶ輸出産業。フィリピン人が栽培するビコール地方から、日本人移民によるダバオへ。
- \* 日本史： 製綱用、製紙用、真田用。麻真田産業は、原料をすべて輸入に頼り、加工して輸出する近代日本の工業の端緒
- \* 地域社会史： 農漁村の女性・子ども・老人、都市の貧困層の副業。成人男性以上の稼ぎも
- \* 安価で手の込んだ真田を原料とした婦人用帽子は貴婦人から庶民のファッションへ。第一次世界大戦後の大衆文化に彩りを添えた。
- \* 石川繊維資料館 <http://www.tees.ne.jp/~silk/kannaisyoukai/013.html>

# 日本製商品のフィリピン進出

- \* イギリスをフィリピン市場から排除したアメリカは、銀本位制のアジア市場に進出できず
- \* 種々雑多な日本製日用雑貨類が、銀本位制の中国と関係深い大阪・神戸中心に進出
- \* 日本からの輸入額はアメリカの1割にも満たなかったが、安価な日本製雑貨類が、都市の下町や地方社会に普及。

## ダバオ日本人の出身地

- \* 1936年10月現在ダバオ領事館調査で、各出身府県別人口をみると、多い順に、沖縄県6755人(48.5%)、福島県1365人(9.8%)、熊本県1157人(8.3%)、広島県835人(6.0%)、福岡県613人(4.4%)、山口県463人(3.3%)、長野県311人(2.2%)、鹿児島県299人(2.1%)となる。
- \* 沖縄県、福島県出身者が多いのは、初期のダバオで活躍した沖縄県出身の太田興業株式会社の重役の大城孝蔵と福島県出身の医師の橋本音治の功績が大きい。満洲移民のような国策移民でも、南米各地へのような集団での契約移民でもないダバオに渡航したのは、具体的な成功話とともに移民取り扱い会社の代理人の活動が活発だったからである。渡航手続きを移民取り扱い会社に任せて、渡航許可から1ヵ月足らずで出帆し、家族、親戚、知人のいるアバカ耕地に入ってしまったものと思われる。

## 女性・子ども人口の増加

- \* 東南アジア在住の日本人人口の男女比は、「からゆきさん」の増加する1900年(明治33年)以降、女性の割合が高く、たとえばマニラおよびその周辺では廃娼運動が高まる1918年(大正7年)ころまで25%前後またはそれ以上を保っていた。
- \* いっぽう、ダバオでは1919年まで5%にも満たなかった女性人口比率が、その後急激に上昇し、1928年(昭和3年)には20%に迫り、35年以降は30%を超えるようになった。商業関係でも家族の人口比率が増加し、1940年にはフィリピン全土で日本人家族人口1万4891人となり、本業者(就業人口)1万3840人を上回った。日本人渡航者は、たんなる海外出稼ぎ労働者から、定住を目的とした家族連れの移住者になっていった



# 小学校と日本文化

- \* 定住傾向が強くなると、当然子弟教育の問題が出てくる。東南アジアで最初に日本小学校が創設されたのは、1912年にシンガポールにおいてであった。その後、1917年にマニラ、1925年にインドネシアのスラバヤ、1926年にバンコクにでき、フィリピンではダバオの13校のほかバギオ、セブ、イロイロ、ビコール、インドネシアにはバタビアなど5校が開校した。
- \* それらの学校教育で問題となったのが、いわゆる「南洋ぼけ」である。日本人として日本文化の理解は必須であったが、東南アジア現地で生活するためには現地文化の理解も重要であった。結論として、日本の国定教科書をはじめとする教材を中心に、「忠孝」などの日本の価値観を核として、現地文化を周辺に付着しているものとして教育された。しかし、日本人家庭で、子守、炊事、洗濯、車の運転などの使用人による影響も無視できず、日本人学校や寄宿舎での教育が重視された。

# 日本とのつながり

- \* 東南アジアの日本人社会の中心に、まず日本大使館・総領事館・領事館があり、その下に日本人会、日本商業会議所、日本人小学校などがあつた。出身府県別人口でみたとおりに、県人会を通じた日本とのつながりがあつた。『比律賓年鑑(昭和十六年度版)』をみると、つぎの県人会に関連する団体があつたことがわかる:「愛知県マニラ貿易斡旋所」「熊本県海外協会マニラ支部」「マニラ沖縄県人会」「防長海外協会マニラ支部」「長崎県海外協会マニラ支部」「福島県人会」「福岡県海外協会マニラ支部」「福島県海外協会」「ダバオ信州人会」「ダバオ三州人会」「ダバオ佐賀県人会」「広島県拓務協会」「岡山県海外協会支部」「熊本県海外協会支部」。

## 戦後の活動

- \* 戦後、引揚者の親睦団体として、ダバオ会、マニラ会があり、ダバオ会は1972年に沖縄摩文仁の丘に「ダバオ之塔」、福島支部はダバオに「福島之塔」、沖縄支部は「沖縄之塔」などを建立した。いっぽう、マニラ会は1975年に「フィリピン在留邦人戦没者慰霊之碑並びに子守地蔵尊像」を、愛知県蒲郡の三ヶ根山の「比島観音」を取り巻く慰霊碑のひとつとして建立した。
- \* 慰霊碑建立を境に、会の活動は二世中心に移り、日本人小学校同窓会などを中心に現地に残った混血二世などの支援活動が活発になった。日本国籍の取得や日本での就労を支援し、今日までその活動は続いている。

# 参考文献

- \* 大谷純一『比律賓年鑑（昭和十六年度版）』1940年
- \* 蒲原廣二『ダバオ邦人開拓史』日比新聞社、1938年
- \* 国際協力事業団編『海外移住統計』1988年
- \* 小島勝『日本人学校の研究－異文化間教育史的考察』玉川大学出版部、1999年
- \* 早瀬晋三『「ベンゲット移民」の虚像と実像－近代日本・東南アジア関係史の一考察』同文館、1989年
- \* 早瀬晋三『フィリピン行き渡航者調査（1901～39年）－外務省外交史料館文書「海外渡航者名簿」より』文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班、1995年
- \* 早瀬晋三『フィリピン近現代史のなかの日本人－植民地社会の形成と移民・商品』東京大学出版会、2012年
- \* 早瀬晋三「硬質繊維（マニラ麻など）」『世界史叢書第5巻 ものがつなぐ世界史』ミネルヴァ書房、近刊